

## 絵を読む

三森ゆりか

ドイツやデンマーク、スペインなどヨーロッパ諸国では、文章ばかりではなく、「絵の分析」が行われている。幼稚園・小学校で分析の対象となるのは、絵本の絵、写真、標識、文字のないコマ漫画などだが、中学高等学校では風刺漫画や芸術的な絵画までと幅広い分野の絵が対象となる。「絵の分析」の総合的な目的は、像で提示された対象に秘められたメッセージを分析し、解釈し、批判的な検討をすることである。ただし、幼稚園・小学校と中学高等学校の主な目的には相違があるので、ここでは分けて説明を試みたい。

幼稚園・小学校（主に低学年）における「絵の分析」の目的は、おおむね次のようなものである。

① 字の読めない子ども、十分に文章の読めない子どもに、クリティカル・リーディングの基礎技術を獲得させる。

② 対象を注意深く観察する力を引き出す。

③ 子どもの論理的思考力、認識力を引き出す。

幼児・初等教育における「絵の分析」の重要な機能は、クリティカル・リーディングの準備段階として、その基礎技術を子どもに獲得させることである。クリティカル・リーディングの指標が「絵の分析」に直接応用されるわけではないが、そもそも対象を分析したり解釈したりすることの意味を子どもに自然な形で認識させることが「絵の分析」の役割である。「絵の分析」を通して、子どもは全体から細部にまで十分に注意を払いながら絵を見る（読む）ことを学ぶ。そして、絵の中に込められたテーマを発見することを学ぶ。

子どもには生まれつき鋭い観察力が備わっている。子どもに絵本を読み聞かせたことのある大人であれば誰でも経験があるだろうが、一緒に絵本を見ていると子どもは大人が気づけない細部まで絵を観察し、たくさん発見をするものである。こうした子どもの能力を最大限に引き出すとするのが「絵の分析」の役割なのである。子どもは自由に任せると、子どもは気になる部分にだけ注目し、絵全体の意味を考えたり、解釈したりするには至らない。「絵の分析」では、このような状態にある子

どもを巧みに誘導して、絵全体と細部を見る方法や、色やタッチに気づかせ、自分の考えとその根拠を発見させる。子どもは遊び感覚で「絵の分析」を楽しむが、実は知らず知らずのうちに、観察力と論理的思考力、クリティカル・リーディングの基礎技術が見事に獲得されていくのである。このようにして育った子どもは、自分の生活環境にあるあらゆる物を知的好奇心を持って注意深く観察できるようになる。私の教室での経験では、小学校一年生から入会して十分に「絵の分析」を経験した子どもと中学生から入会していきなりクリティカル・リーディングを経験した子供との間には、観察力や論理的思考力ばかりか読解力にも大きな隔りがある。

一方、中学高等学校で実施される「絵の分析」は、人間の教養の幅を広げ、人生を豊かにするのに役立つ。例えばドイツの「絵の分析」の教科書には、宗教画から現代画、写真まで様々な種類の絵画が納められており、その分析の方法が詳細に記述されている。これは実は作文の教科書で、絵画の分析と解釈の方法を示すと同時に、その説明の方法を提示してある。美術を特に専攻しない人でも、このような教育を受けると絵を

見たときにその場に居合わせた人々と教養ある会話が楽しめるだろうし、個人の絵の解釈の違いを巡って、知的な討論を楽しむこともできるであろう。そして、何よりも美術館を訪れたときに、絵を見る楽しみが倍増するに違いない。

幼稚園から高等学校に至るまで、「絵の分析」において一貫して重要なことは、分析と解釈は個人のもので、という認識である。つまり、クリティカル・リーディングと同様、二〇人いれば二〇通りの分析と解釈がある。とりわけ幼児教育の段階では、絵を見る技術を教えることにより、大人の絵の見方を子どもに押しつけず、子どもの自由な発想を認めることが大変重要である。

来年度からの教科書改訂により、小学校低学年では文字が消え、絵を通じて子どもの表現力を養う試みが増えるという。子どもと向き合う前に、まずは子どもを導く側に立つ教員や親が、正しい「絵の分析」の技術を身につけてもらいたい。そうでなければ、「絵の分析」は単なる遊びで終わり、本来の国語教育が目指す読解力や表現力の教育には繋がっていない。

（つくば言語技術教育研究所）